

京都大学-香港バプティスト大学合同デザインスクール 実施報告

2015年7月14日 村上陽平

1. 概要

京都大学での FBL/PBL, さらにサマーデザインスクールを経験した本科生 (修士 2 年) を香港に派遣し, 香港バプティスト大学の学生と合同でデザインワークショップを行うことによって, 修得したデザイン理論やファシリテーションの手法の定着を図ることが本合同デザインスクールの目的である. 今年度は, 京都と香港の 2 カ所で開催し, 両方に横断したテーマとすることで, 両都市の文化差に着目し, 異なる環境に対して国際的な視点で取り組むことを目指す. 前半は香港バプティスト大学の学生を迎え入れて京都で開催し, 後半は京都大学の学生を香港に派遣し香港で開催する.

このイベントは沖縄でのデザインスクール (修士 1 年次が中心) の次の機会として設定するもので, 英語でのワークショップである点, 京都と香港という異なる環境に横断する国際的な課題を対象とする点, 初めて状況を理解する海外でも問題発見, 解決を求められる点で難度が格段に高い. 博士課程でのフィールドインターンシップやリサーチインターンシップなど本格的な武者修行の前段としての位置づけるものである.

2. スケジュール

2015年4月16日 (木) ~4月19日 (日)

4月16日 (木)	午後 京都のフィールド調査
4月17日 (金)	各ワークショップでフィールドワークやアイディエーションを実施
4月18日 (土)	於: KRP
4月19日 (日)	午前 発表準備 午後 中間発表

2015年5月28日 (木) ~5月31日 (日)

5月28日 (木)	関西国際空港から香港国際空港へ 午後 香港島のフィールド調査
5月29日 (金)	各ワークショップでフィールドワークやアイディエーションを実施
5月30日 (土)	於: 香港バプティスト大学
5月31日 (日)	午前 発表会 夕刻 香港国際空港から関西国際空港へ

【ワークショップ@京都】



【ワークショップ@香港】



【最終発表会】



3. ワークショップ

香港では排出されるゴミが焼却場の容量を超えつつあることが問題となっている。特に住宅用地の少ない香港では焼却場を建設できるような土地が少なく、地元住民からの反対が強いため、焼却場の建設が進まず、ゴミ処理が大きな問題となっている。そこで本年度は、香港のゴミ処理問題を対象とし、テーマを二都市間グリーン協定のデザインとした。二都市間とすることで、京都と香港の差に着目し、京都の環境の取り組みを香港に適応させることをテーマに含めている。一方、デザインプロセスに関しては、今回は相互に京都と香港を訪問するため、異文化融合と異分野融合を手法として用いた。

具体的には、京都セッションでは主に異文化融合に焦点を当て、香港バプティスト大学の学生がフィールドワークで得た気づきから京都大学の学生が京都の特徴を知るとともに、そのような差を生じさせた文化的または環境的要因の分析を行った。続いて、発見した文化的要因や環境的要因による差に着目して、京都の取り組みを香港に適応させるアイデアの強制発想を行った。その結果、食べ残しを減らすための料理の量を調整できるメニューや完食をシェアするための SNS サービス、テイクアウト時のゴミを減らす my お弁当、宅配サービスがゴミを収集して帰るサービスなどが提案された。

一方、香港セッションでは、京都セッションで作成したアイデアの検証に重点を置き、出てきた課題を異分野融合で解決することを試みた。まずはグループごとにフィールドワークを行い、インタビューや観察、測定などを通して自分たちのアイデアの受容性や実現性について検証を行った。その結果、ステークホルダーのインセンティブが一致しないことなどを発見し、例えば教育学の学生は体験学習などのアクティブラーニングによる児童への教育によって消費者のゴミ問題への意識を変えることで、行政や企業のインセンティブを高める方法などが提案された。

4. 参加者

<学生>21名

京都大学デザイン学本科生 13名

香港バプティスト大学 14名

<教員他>13名

教員 11名 (京都大学 4名, 香港バプティスト大学 6名)

職員 2名 (京都大学 1名, 香港バプティスト大学 1名)

5. アンケート結果

本科生にアンケートを実施し、計 10 名から以下の回答を得た。

【質問】

ワークショップでの活動の内容と所感を、特に印象に残ったことを中心に記載。

【回答 (Arseny)】

Doing workshop in the international team is more difficult than doing it with a mono-national one, because of perception differences. I believe, that such a diversity helps to formulate better solutions and proposals on itself, because not just of educational backgrounds, but the cultural backgrounds as well.

【回答 (バク)】

今回ワークショップでは、香港人のエアコンの利用パターンにテーマを絞りデザイン活動を行った。そのテーマは、京都のワークショップの中で、向こうのチームメンバーと話あって決めていた。最初に、単に香港は室内 18 度が基本だよと聞いた時には、耳を疑いつつ本当に？と思った。だが、日本の 28 度と香港の 18 度の違いには、単純な温度の差だけではなく、人々の認識、生き方、文化、技術、又は制度など様々な側面が出てくる差異が反映されていた。そして、京都のワークショップでは、香港人のより環境に優しい冷房の習慣への転移のための、技術的、心理学的、また社会的なアプローチを通したソリューションを簡単に考えてみた。そこで、香港のワークショップでは、フィールドワークを通して、実際様々な所々の冷房のパターンを観察しつつ、それに影響を与え得る要因を見出してみた。更に、京都のワークショップで提案したソリューションを深掘りし、それに制度的なアプローチを加え、最終的により統合的で現実性を持ったソリューションを提案できたと思われる。だが、フィールドワークの事前準備が足りなかったことや凄く密な日

程上、技術的アプローチに関するより深めた考察が出来なかったことは多少残念であった。

総合的に今回のデザインプロセスについて振り返ってみると、最初には京都と香港の持つ色々な側面を比べ、共通点や差異を見出す。それから問題を設定し、その問題を多角的に検討することによってそれを構成する要因(皮相的なレベルから、隠れている深層的なレベルまで)を明らかにする。また、各要因と問題の関係について仮説を立てフィールドワークや資料の調査によって、その仮説を検討する。最後にそれぞれの要因に対する対策を立て、その実現可能性を検討し、対策を統合する。大雑把に言うとそのようなプロセスだったと思われる。

もちろん個人差はあるけれど、向こうと人々は社会的で自分の意見を積極的に言う傾向があったという点では、自分的には具合がよく合い、楽しく彼らとのチームワークは出来たと思われる。又、最初には若干意見が合わない所があったけれど、ちゃんと意見を聞き、否定するのではなく、その意見についてコメントをしたり、もしくは代案を提示したりすることによって議論を建設的な方向に展開出来ると実感できた。また、じっくり振り返って見ると彼らの意見が妥当であり、それによって議論が前に進むことが多かった。この経験を通して、いくら異文化、異分野の背景を持った人々と仕事をするとしても、開放的な姿勢でコミュニケーションをちゃんと取り、議論を段々拡張して行けば、意味のある結果が出せるという自信を持つようになった。

【回答 (阿部)】

今回のワークショップは英語で行われたが、私はチーム内で(おそらく全参加者の中でも)突出して英語能力が低く、時には三度聞き返しても相手の意見を理解できないこともあった。また、議論において主張したいことがあっても、それをどのような言葉で表現すべきかがわからず、特にワークショップの後半では、自分が議論の邪魔をしてしまわないよう、相手の顔色を伺うことに終始していた。自分の英語能力の無さを痛感した8日間であった。

ワークショップでは香港でのエアコンの利用の仕方を取り組み対象とした。香港の特異なエアコンの利用状況を明らかに出来たという意味では、問題発見はある程度うまくいったように思われる。しかし、最終的なプレゼンで発表した内容は、その解決策として検討が不十分であったように思う。また、香港で実践したフィールドワークがあまり意味をなさず、京都で提案したアイディアからほとんど変化がないものを発表してしまったことは大いに悔やまれる。チーム内での事前の打ち合わせを積極的に行い、フィールドワークでどこに行っても何のために何をするのかを、より具体的に定めるべきだったように思われる。

全体的にほとんど何もできず、後悔ばかりが残るワークショップであったが、反省すべ

き点を反省し、自身の今後の成長へと繋げたいと思う。

【回答（伊川）】

京都と香港という異なる地でのワークショップは、私にとって非常に実りのあるものでした。とりわけ次の3点が、ワークショップを通して印象に残りました。

1つ目は、自分の専門である心理学が社会的な問題解決にとっても役立つということです。具体的には、食べ物を自ら育てる「責任感」の心理が、食品廃棄を解決する食育のアイデアにつながりました。社会問題と人々の心理が密接に関わることを実感し、ワークショップ後に心理学を学ぶ意欲を高めることができました。

2つ目は、香港の学生が議論にとっても積極的であることです。香港の人は、周りの目を気にせず発言し、自分のアイデアが反論された時は納得するまで引き下がりませんでした。そして香港の人は、チームのまとめ役を買ってリーダーシップをとっていました。日本人は人目を気にして意見を言わない傾向があるので、香港人の外向きの姿勢を見習わなければならぬと思いました。

3つ目は、目標実現までのプランが具体的であったことです。ワークショップでは、まず最終日までの目標が提示された後、そこから逆算してその日に何をすることが決められました。毎日何をすることが全員に共有されたので、目標を見失うことなく効率的にワークショップが進められました。

ワークショップで得た意欲や姿勢、スキルを、これからの研究活動やファシリテーション研修でも活かしていきたいと考えています。

【回答（寺川）】

「都市間グリーン協定のデザイン」という大きなテーマに対し、当初はどのようにアプローチすればよいのか、手探りの状態であった。ここにおいて手がかりとなったのは、やはり文化差であった。初日のフィールドワークの中で同チームのHKBUの学生が香港と京都とのゴミ箱の違いに興味を示し、結果としてこの気づきが最後まで提案の基礎として維持されることとなった。このような最初の興味、些細な気づきがデザインの展開につながっていくことは、これまでのWS等でも経験されてきたことである。この点において、文化差は特に有効に機能するという点は今回学んだことの一つである。

また、合計8日間という期間のWSは初めて経験するものであるが、これまでにない経験ができたと思う。特に、前半で提案したアイデアを、後半で別の視点からブラッシュアップするという進め方は、より現実的なデザインの実践を考える機会となった。ここにおいて、異分野、異文化の人たちとの協働という取り組み方が引き立てられたものと思う。

一方、本WSでは「香港の課題解決」としての議論はある程度実践できたものの、「香港の良いところを活かす」という段階までは、時間的、能力的な点から十分には至ることができなかつたように思われる。これは、今後より良いデザインを達成するために経験を積んでいく中での課題である。

【回答（大倉）】

今までもワークショップによって異分野の人と何かを考えていくという機会があったが、香港の学生の方々という、海外の人とチームを組んで行うワークショップは初めてで、ライフスタイル・考え方の違いや、文化差が大きくあるのではないかと、その中で上手く共同出来るのか行う前は不安に感じていました。しかし、京都に来てもらい、香港に行き、お互い会話を通して行く中で、なるほど！そういう風に考えてるのか、そっちの方が良いのか、など考え方や価値観の違いが見えてきました。またフィールドに出て実際の様子を見ることで、その土地、その地域に合うような解を考えることが出来、とても有意義なワークショップだったと思います。

【回答（長見）】

今回のワークショップでは、特に二つの点が印象に残った。

ひとつは香港と京都の二つの土地からグリーン問題について考えた点である。やはり双方を体験することでお互いのイメージが共有されているというのは大きかった。どちらかだけの訪問では、お互いに議論しても片方のイメージをつかめないがために、議論の方向性がずれる可能性が多々ある。今回はそれがあまり起こらず、自然に何を考えるべきかに話を移すことができたように思われる。

二つ目はフィールドワークのプランニングの点である。フィールドワークでは、何を調べるかをきちんとプランニングすることがかなり重要なように思われる。私のグループでは、街に出て実際に通りのごみ箱を数えたり中身がどれくらい入っているかの割合を出すことで、どれくらいが無駄に設置されているかを調査した。こうしたデータを少し集めるだけでも、その後の議論が大きく変化することになる。

以上の二点が非常に印象に残ったワークショップだったと思う。

【回答（藤野）】

4日間×2回の長期にわたるフィールドワークでしたが、あっという間に終わってしまいました。

僕たちのチームは既存のオンラインシステムを活用した、リサイクリングシステムのデ

ザインとそれを支える教育のデザインに取り組みました。全員が個性的でありながら、それらの個性がバランスよく異なっており、よく歩き・よくしゃべり・よく食べ・よく笑いながら、情報学と教育学が融合されていき、面白いアイデアをデザインすることができました。

特に印象に残っているのは、バプティスト大学の人たちのホスピタリティの高さです。毎日みんなでいろんなところに連れて行ってくれ、電車の乗り方から政治の仕組みまで様々なことを教えてくれました。

あっという間に終わってしまった 8 日間ですが、振り返ってみると、とても多くのコミュニケーションを積み重ねていたことを感じます。このようなワークショップが今後も続き、多くの人が異文化コミュニケーションの楽しさに気づき、そこから面白いアイデアを生み出せることを願っています。